
FAIRY TAIL外伝 ~ 輝きの魔方陣 ~

~ = し ~ ぷ ~ ど = ~

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL外伝 〈輝きの魔方陣〉

【Nコード】

N4844X

【作者名】

くはしくふくどはく

【あらすじ】

フェアリーテイルの二次小説です、オリキャラ、オリ主、オリ設定などなど、原作崩壊、キャラ崩壊アルと思いますが、頑張ります!!

・・・あ、転成モノじゃないです

プロローグ(前書き)

とくにないっすけど、いきましょー

ブローグ

「ナツ!!そつちだ!!」

「オウ!!任せとけて!!」

火竜の咆哮!!

ゴガアアアアアアアア!!!!!!

「キャアア!!!!」

「リサーナ!!何でそんなところにいんだよ!!!!」

「熱っ!熱っっ!!」

「任せろ!!アイスケイザー氷欠泉!!!!」

「ちよっ!強いつて!!!!」

「何してんだお前らアア!!」

彼らの前にいる魔物、「ガルグイユ」

大きな牛のような魔物である、

それに苦戦？する子供？の

ナツ、リサーナ、グレイ、そして……

「ブライト・ケイン!!!!!!」

ガルグイユの前方に光の爆発をおこした男……の子

ウッド・クラウディアと言った、

手の甲には灰色に輝く紋章、

妖精のようなその紋章の組合ギルドを

妖精フェアリーテイルの尻尾といった……

ズシャアアアアア

音を立て崩れ落ちるガルグイユ、

村を襲うモンスターは倒された、

「依頼完遂つと。」

ふう、と息をついてウッドは皆の方を見る、

歓喜に任せて火を吹くナツと、

コゲた服にうなだれるリサーナ、

自分が服を着ていない事に気づいたグレイ、

そんな風景が日常、そして至福、

ウッドはそんな光景をみて、顔をほころばせた、

「ほーら、お前ら帰るぞ！依頼終ったんだからな、帰って祝勝会だ
！！！！！！」

「おおおおおおおおおお！！！！！！」

小さな妖精魔道士たちの、日常生活、それは……

朝起きて、ギルドに行つて、皆と会つて、仕事を選び、

仕事に行つて、帰ってきてから、皆で喜びあう、

それが魔道士、それがフェアリーテイル

今日もウッド達は、ナツの酔い姿を見ながら馬車ギルドで家へと

帰還するのだった……

「ギルド・フェアリーテイル」

「ただいま……！……！」

桜色の髪の毛のナツの声、……かなり大きい。

その咆哮？はギルド全体に響き渡る、

が、1秒足らずで周りの声にかき消されてしまう

ナツやりサーナは空いている席を見つけると、

ウツドとグレイに手招きをする、

ウツド達はそこへ座り、ウェイトレスに飲み物……といってもナツは

食べ物もだが……を頼んだ。

仕事終わりの祝勝会、いつもの日常だった。

今回の仕事は、「村を襲う魔物退治」というもので、

村を襲うガルグイユを倒してくれ、という物だった

葡萄ジュースを一口飲みながら、ウッドはぽつりといった、

「今度・・・花見でもいくか？」

「いきなりなに言ってるんだ？」

グレイは呆れ顔で言った、ガキめ・・・って感じに。

するとウッドは、じゃなくてと少し訂正する

「こんどギルドの花見だな、なんか景品決まったか？」

あ・・・ヤベ忘れてた、みたいな表情のグレ・・・

・・・イとナツとりサーナ、

皆決まっていなかったんだな・・・とウッドは言わずに心にしまっ
ておいた

「んじゃー今度皆で景品取りにいこーぜ！ちょうど良い依頼がある

んだ」

「うん、そーしよっか、エルザやミラ姉達もね！」

リサーナが満面の笑みを浮かべる、

「決まりだ！・・・でも今日は帰ってメシ食って寝る！これ決定事項！」

ウツドは葡萄ジュースを飲み干してから言った、

「んんー！！」

ナツが提案に歓喜したのか、今食べているスパゲティに歓喜したのか定かでは無いが、

口いっぱいスパゲティを方張りながら唸る、

がたつと音を立て椅子から立ち上がりウツドは家へと足を進めた、

ファイオーレ王国、

人口1700万の永世中立国。

そこは、魔法の国、魔法が普通に売り買いされ
人々の生活に根付いている、

そしてその魔法を生業とし、仕事に役立てる者がいる、
それを、魔道士と呼んだ、

そして、とある町にとある魔道士ギルドがある

今まで、いや・・・後々に至るまで数々の伝説を生み出したギルド

その名は、「フェアリーテイル妖精の尻尾」。

プロローグ（後書き）

これからよろしくお願いします、じかないんでこんだけですよ

主人公設定（前書き）

完全オリキャラです。

主人公設定

名前：ウッド・クラウディア

所属：FAIRY TAIL
フェアリーテイル

年齢：（今のところ）12歳

フェアリーテイルで、カナとグレイの間に入ってきた少年

生まれた頃から異常な魔力を持っていたが、親、身元は分からない

聖なる光ホーリーという魔法を使い、光を様々な使い方

敵を圧倒する。

ギルドの中では幼いながらも、同年代の中では大人っぽく、ツツコ
ミ役。

ただし、多少天然が入っており、意味深な発言をする事もしばしば、

腰に湾曲剣カトラスという剣を差しているが、

メンバーの前で使う事はなく、本人は、

護身用、と言っているのだが、ギルド介入時から腰に差していて

何か過去に意味があるのでは、と密かにギルドメンバーは思っている。

容姿は薄い茶髪にややつり目、

目の色は黒くていつつも笑顔（関係ない、関係ない）。

家はフェアリーテイルが管理している森の中にツリーハウスを

自分で作り（マスターに許可もらって）そこに住んでいる、

家の中は以外と快適、・・・らしい。

魔法一覧（今の所だせる物だけ）

ブライト・ケイン
光陽爆発

光を収束し、前方に強力な爆発を起こす、
威力を弱めれば、目くらましのための
軽い閃光玉の用になる。

ブライト・カッター
光陽剣戟

研ぎ澄まされた光を手に纏い、敵を切り倒す
ことができる、双刃にもできる。

ブライト・ボール
光陽球体

光の球を造形し、敵に叩き付ける、
大きさは今のところ直径30cmが限度
最大4つまで同時にだせる。

シャイニング・ハーツ
太陽連撃

敵を中心に、無数の刃で切り刻む、
ただし、かなりの魔力を使うので、
連発が出来ないのが玉にキズ

現在話せるのはココまでです、

これからもウツドの活躍、後期待ください！！

主人公設定（後書き）

次回、ウッドー向はビンゴ大会の景品をとるため、

砂漠に向かう、けどそこにはある人物が・・・？

ピンゴと砂漠と伝説召喚（サージユアル）

「あぢい・・・」

太陽がさんさんと照りつける砂漠、

その真ん中に彼等はいた。

ウッド、ナツ、グレイ、リサーナ、ミラジエーン、エルザの6人。

今回の依頼は、砂の中に住む魚の捕獲だった、

2〜3匹取ってきて欲しい、それ以上はお持ち帰り・・・と、依頼書には書いてある。

ピンゴ大会&お花見大会の景品として、持ち帰るつもりだ・・・。

.....が。

「熱い.....。グレイ〜水〜。」

「んなモンねーよ！自分で持ってこいミラ！！」

熱さを訴えるミラ、グレイに水をもらいたい.....

するとウッドは

「っても、砂の中の魚ねえ、聞いた事はあるんだが、美味しいのかねえ。」

.....書いてなかったが、ウッドは痩せているにもかかわらず朝っぱらから

ハンバーグ、焼き魚、サラダ、トーストetc

を食らう人である、一度ナツが挑戦するが、撃沈した。

ザザザザザザザザザアアア.....

「「「「「「?!?!?」「」「」「」

ザバアア!!!

砂の中から体を出す巨体、
「サンドフィッシュ」。

「「「「「でかあああ!!!」「」「」「」(ウッド、ナツ、グレイ、リ
サーナ、ミラジエーン)

「.....でかいな。」(エルザ)

「落ち着いてますねっ!!!」(ウッド)

全長1メートルはあろう魚、これを2〜3匹も取れと!?

「……………」

《で》

「生け捕りじゃなくていい！……いけえ！」

ウツドが叫ぶ、戦闘開始だ。

「ふはああああ……」

「だらしねえなあ、グレイ、ナツ。」

……これはミラ、そういう彼女も息が上がっている、

「フフ……、息が上がっているぞ？ミラ。」

エルザがどこか勝ち誇ったような目でミラを見る。

おお、ホントだ、エルザは大丈夫だ。

ウッドは感心していると、ちらと横目でエルザに見られる、

「やはり……、お前は強いな、その腕ならS級になれるんじゃないか？
最年少で。」

「そんなことあねーよ、実際、エルザやミラ、ナツもグレイもリサ
ーナもいい線いってるぜ？」

謙遜はしていない、自分はまだまだ、と本当にウッドは思っている。
だが……、ウッドは人より数段強かった、魔力ではないなにか
……。

「で……何匹取れたんだ？」

グレイはいった。

「4匹。うん！十分だね！これで景品もオツケーだね！」

嬉しそうにリサーナは言った。

「よし、依頼人のトコいって依頼達成報告だ！」

「おおおおおお……！！！」

~~~~~

帰り道・・・

「熱い！・・・！」

「うるせえ！お前が馬車はヤダ！！っていったからだろーが！！」

グレイの罵声が飛ぶ、ナツが喧嘩売ってる・・・お前が悪いんだろが！！！！

・・・と、あえてウツドは言わなかった。

「それにしても、あつついわねえ・・・ほんとに・・・溶けちゃうよ。」

「溶けはしねえだろうが、せめて焼けるだろーが。」

ミラに冷静に突っ込むウッド、

「んじゃあ跳ねる。」ピョコピョコ。

「なにいきなり跳ね出してんだ、バカか？」

「バカとは失礼な！！せめて教養の無い人といって？」

ピョンピョコ跳ねまくってるリサーナに呆れるウッド、……？付  
けんな。

それから数分後、ナツは異変に気づく。人の気配においに……

「誰だ……？」

独り言のように呟く……

すると、全員がその人影に気づく。

ユラリ・・・

人影が現れ・・・揺れる。

ふッ・・・

そして消える。

「消えた!？」

驚愕したようなエルザの声、

消えた所に駆け寄ってみるとそこには、

「人？・・・てか、女の子？」

そこにはウッド達とさほど変わらなさそうな女の子が、

大きな本を抱えて倒れていた・・・

ビンゴと砂漠と伝説召喚(サージユアル)(後書き)

登場人物出しすぎた・・・。

エルザとリサーナをいつも忘れる・・・。

次回!side???から!!



## 記憶の行方

s i d e . . . ? ? ? ?

熱い . . . .

頭がくらくらしている、

頬を伝う汗の感じがある

眩しすぎるほどの太陽が焼き尽くそうと迫っているみたいだ . . .

砂が靴の中に入っばい入ってくる . . . .

いつからここにいたんだろう。

もう随分と長い時間ここにいた気がする。

熱い、唯熱い。

「だ……めだ……。」

一瞬目の前が暗くなる。

ぐるんと天地が返った。

熱い砂に体が焼けるようだ……

「……………イ……………オイ！」

誰かが私をゆする。

どこか、優しかった……………

#  
#  
#  
#

チュンチュン……………

鳥だ、鳥の声だ……………

気がつくとは私は知らない天井を見上げていた、

知らないベッドの上にいる。

「あ………起きたかい？」

知らない声、誰？

「いや、びつくりしたってそりゃもう、あんた砂漠で倒れてんだぜ？……ケガねえか？水いるか？腹減ってねえか？吐き気しねえか？いきなり笑ったりしねえか？ベッド壊したりしねえか？」

……最後の2つは入らない気がする。

「あなた……は？」

かすれた声でなんとか声を出す

「んあ？あ・・・ああ忘れてたな、俺あウッド、ウッド・クラウデ  
イア。あんたは？」

名前・・・、そうか、名前か。私は――

「ユウナ・・・・・・・・。ユウナ・ホルン」

私は『名前』をウッドと言う人にいった、

「そっか、んじゃユウナ、お前は何してたんだ？あんなトコで。」

トコ？あの熱い場所？目的・・・・・・・・？

「あ・・・・・・・・あれ？」

目的・・・場所・・・何故。

ギョウウウウウウウウ

戻ってくる、記憶が、目的が。

「あたしは・・・」

けど・・・

「あたしは・・・」

消えてしまった、記憶が。

「あ……あれ？」

「……思い出せた事がある。」

「本……」

「いつの間にか、大声を出していた。」

「あの本は……っっっっ！？」

s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t  
.  
.  
.



加入

S i d e : ウ ッ ド

・  
・  
・  
・  
・  
・  
?

本  
・  
・  
・  
・  
?

俺は少し考える、  
・  
・  
・  
本？

・  
・  
・  
ああ、本か、

「あれなら、ギルドに――」

「ありがとう――！」

「……風だ。いま、俺の目の前にいた少女は風になった。」

「……、風のまほう？」

「……違うな。根本的に違うな。」

「違うか。……ってかあの子ギルド知ってたのか？」

\*\*\*

ーマグノリアの町ー ーギルド内ー

「マスター。ユウナ……。女の子見なかったあ？」

俺はヨボン、とした老人……ギルドマスター……に話しかける、

「あ……ああ、見たぞ、あの女の子じゃの。あの本を探しているよ。」

「探してる？」

……持ってどっか行った、じゃないのか？

「ああ、きつと資料庫にいるじやろつて。」

「ありがと。」

一言言つて資料庫に向かう、．．．なんか怖いぞ。扉の奥からガサガサ聞こえるぞ。

ギイイイイイイイ．．．．．

重たい扉を開ける。

そこには一冊の本を見て、目をキラキラさせているユウナがいた。

「見つけた！」

本を持ってくるくる回っている。危ないひと……じゃないない。喜んでるだけだ。うん。

「あ、ウッド！本、あったよ！！！」

「そ……そうか、よかったな……？」

……よく分かんないぞ。

よく分かんないけど、大切な本らしい。

\*  
\*

「サイジューアル  
剣次伝？」

「うん、そだよ。あたしの武器」

「どうやらユウナの本は魔法らしい。」

「本の魔法って、どんなのなんだろう。」

「で、なんで砂漠にいたんだ。」

「そっだ、それが聞きたかったんだ、」

「そうするとユウナは少し困った顔になり首を振った、」

「分かんない……。」

「……だよ、この展開、き・お・く・そ・う・し・つ・つ・ってや  
つだな、うん。」

「記憶がねえのか。」

「くりとうなずくユウナ、はあ……。」

「そうか。俺と一緒にだ。」

「えっ。」

「俺にも……親の記憶がない。」

……出たよこの展開。by作者

「これからどうすんだ？ユウナ」

「分かんない」

……そか、んじゃあ、あれだ。

「入る……？このギルドへ。フェアリーテイルへ。」

「え……？」



いや………………。もうそうしかないじゃん。物語的に、

「で…………も…………ギルドって？」

知らないのか。

「細かい事言いつこなし。行くところないんだろ…………こいよ、俺達の家！」

強引な感じ、だけどこいつは快くOK、うん、そうゆうノリはいい、

そんなこんなで家族になったこいつ、仕事の時記憶が戻るかもって  
ね。

それも兼ねて。

今から俺は、色々な事をこいつに教えるぞ。

ギルドとか、仕事とか、

あ………。こいつ何処で寝るんだ？

うちか？うちのなか？

いいのか？それで、あいつは。

仕事で金が貯まったら寮に移ってもらおう。

うん。

## 剣の舞

side・ウツ

カキン、カン、ガキイン

激しく金属のぶつかる音がする

緋色の髪をなびかせながら彼女は新入りの女の子と刃を交えていた。

「くっ、」

その新入りの女の子ユウナである。

「いっつたあゝ。もうちょっとやさしくしてよあゝ」

・・・ムリだろう。相手はあの――――

「ふふ・・・コレでも優しくしたつもりなのだがな。」

・・・エルザだぞ。

・ ユウナが加入してから早1週間、コイツも徐々になれてきたな・・・  
ぱすっ、と音を立ててユウナの剣は本の中に収まった。

ユウナの本はあらゆる物質を入れる事が出来るらしい、もっとも、  
まだよく分からないが・・・

「ほーれ、修業もこんなもんでいいだろ、ギルド行くぞ。」

ギルド脇の空き地だから約50歩で帰れるが、

そういつてさっさとギルドに戻った、全く・・・なぜ俺が付き合わ  
なければならんだ。

ギルドに戻るとグレイがカナと座っていた、・・・割り込んでやる  
う。

「ようウツド、なにしてたんだ？」

「しゅぎょー」

「そ・・・そうか？」

まったく・・・。グレイめ・・・効くなよ

さーで、仕事仕事。

ん？

なんだこれ？

「……ぐれーい？コレなんだ？」

「ああ？仕事だろ？」

「うん、そうなんだが……」

「な……なんだこれ？」

おれらはその仕事の怖さを知らなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4844x/>

---

FAIRY TAIL外伝 ~輝きの魔方陣~

2011年12月11日11時47分発行